自己実現について

——E・フロムの「反逆者」という青年を中心的課題とする一考察

佐藤智彦

本論で述べられる自己実現とは、「ひとが生まれる」といった事態を指す。「ひとが生まれる」のは、鶴見俊輔によれば、「今まで自分にそなわった力では、それとかくとうしても、組みふせることができない。そういう恐ろしさの中から、あたらしい自分が生まれる」(『ひとが生まれる』)。だが、こうしたことは、いったいいかにして可能なのか。そのことを原理的に問い直す、ということが本論の試みである。

副題に「反逆者」というタイトルをつけたのは、幾分思わせぶりなところがあると思われるかもしれない。しかし、これは人目を引こうとするような関心のためではなく、自戒の念をこめてのことである。

反逆者という青年は、口では威勢のいいことを言っているが、性根は甘えている、結局は世の中や社会の制度などなにもかもが自分の気にくわないだけなのだという人のことをいう。彼の威勢のいい発言は、「本質的に一種のいどみにすぎない」(E・フロム著『自由からの逃走』日高六郎訳)。だから、あえて社会心理学者E・フロムは、このような人たちのことを「反逆者」だと呼んでいる。

ひるがえってみて、私たちの生きる時代はどうであろうか。「ほんとに最近の若者は…」といったため息まじりの口調はいたるところで聞かされている。このような一部の若者たちのことを指して、つまり口では威勢のいいことを言っているが、性根は甘えている、結局のところ世の中のなにもかもが自分の気にくわないだけなのだという一部の若者たちのことを、「反逆者」だと捉えても決して大げさな表現にはならないであろう。

だが、それでは、世間一般に反逆者だと揶揄されるような若者たちが、俗にいうところの「大人になる」ためには、もっと手厳しくいえば、「人間になる」ためには、いったいどうすればよいのであろうか。それは、いかにして可能なのか。

このことを反逆者という青年の自己実現の目標とし、あくまで自己批判を踏まえていることを自覚しながら、その本論の中心的課題を考察していきたい。そして本論の主題である自己実現については、青年の目標達成までの道のりを通じて明らかにしていくことにしたい。

一般に人間的成長、成熟の凝縮した型と目される自己実現というものに対して、こうした若者を中心的課題として据えることによって、かえって原理的に洗い出す、ということが可能になるのではないかと考えている。

ところで、では、こうした若者は、よくいわれるように何も感じなくなっているのであろうか。このことは一面、たしかに事実であると認められる。彼らは他人の気持ちが理解できていない。しかし他面、反逆者という概念を導入した経緯から見ても、このことは事実に反するといえる。激情にはしりやすい。この矛盾する感性のありかたは、何に原因があるのだろうか。つまり一方では、他人の気持ちが受けとめられていないと、したがって冷淡だとみなされるような感じかたであり、しかし他方で、非常に多感的であり衝動に駆られやすいとみなされるような感じかたは、何に問題があるのであろうか。

こうした感性のありかたについて、「敏感さと感受性」とをハッキリ分けて考える早坂泰次郎の考え方に注目してみたい。つまり、反逆者という青年の感性は、「人間関係への閉ざされた感じやすさとしての敏感性」（足立叡著『臨床社会福祉学の基礎研究』）である。こうした感性は「自分というもの」（木村敏著『自覚の精神病理』）を中心にしている。

ここで自己実現の一般論と関連する。人は感性の敏感さから、「自分というもの」をめぐって、現実の世界へ問いを発し、なんらかの解答を得ようとする傾向に陥りやすい。そこでは感性が、対人的感受性へと展開されていかない。この「自分というもの」が壊されなければならない。

この点で一般に考えられる自己実現の努力のありかたとは、逆の方向性をおびてくるといえる。つまり、普通自己実現という用語で連想されるように、何がしかの理想の自分を追い求めて努力するのではなく、現在の「自分というもの」を見つめ、突き崩していくように努力しなければならないのである。なぜなら、理想の自分を追い求めるのでは、意識され対象化された「自分というもの」を肥大化させていく傾向に陥りやすいからである。

では、どのようにして自己を突き崩すのか。ここで、早坂泰次郎の述べるように「人は一人では生きていない」（早坂泰次郎編著『〈関係性〉の人間学』）という関係性の存在論的事実に着目したい。この関係性に気づくかどうかにかかっている。なぜなら、私たちは「自分の人に関わる姿が自分では見えない」（佐藤俊一著『対人援助グループからの発見』）からである。関係性へ気づかされたときに、他人から教えてもらうのである。このままでいいのか、と揺さぶられる。そこから、学んでいくのである。ここにおいて、自己否定の契機が成立する。反逆者と呼ばれる青年にとって、この過程が容易ではないことは想像に難くないであろう。

この関係性を忘却、無視、軽視して、世論や常識といった「匿名の権威」（E・フロム著『自由からの逃走』）のもとに生きるステレオタイプの人々を、本論では臆病ではないか、と問題提起した。というのは、自分自身の生を生きるためには、今何が問題であり、何が臆病であるといわれうるかについて認識しておく必要があると思ったからである。

関係性へ気づかされたときに、今のままの自分では通用しないと自覚させられる。このような状況に立たされて、人は悩まないであろうか。葛藤しないであろうか。

そしてまさに自分が問われているという自覚が、人を主体的に生きようと仕向ける。あがくのである。もがき苦しむのである。そうして、V・フランクルの述べているような「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題ではなく、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」（V・フランクル著『夜の霧』霜山徳爾訳）ということを身をもって知っていくようになる。

彼は、失敗を繰り返す。こうした失敗を繰り返す姿は、失笑や嘲笑をかいやすい。それでも彼は自分の信念にしたがって、前に進もうとする。そうした目には見えない苦悩の集積を、「苦悩の冠」（同上）を規範として彼は生きるようになっていく。

「苦悩の冠」と称したのは、この核となる部分は、他人の失笑や嘲笑にも、揺らぐことなく鋳鉄されたものだからである。そして「苦悩の冠」を規範として生きる、と述べた。この規範は、もはや単なる主観にとどまらない。なぜなら、失敗は常に具体的なものであり、こうした失敗の繰り返しから、鍛え上げられたものだからである。そうして苦悩の冠を規範として、問われたことに応えるということができるようになっていく。すなわち、自分自身の頭で物事を考え、判断し、決断することができるようになっていく。

ところで、では他者との関係はどのようなものになっていくのであろうか。彼は幾度となくはげしい懐疑におそわれる。なぜなら、これまで「自分というもの」を意味づけていた自明性を喪失したからである。よってまた彼は、いちじるしく安定性を欠いている。そこでは彼にとって、他者は存在しない。竹内敏晴が述べているように「他者が笑えばまた嘲られたと思い、まじめに見つめてくれれば、とがめられるかとおびえるのだ。そこには実は〈他者〉は存在せず、ただ等質の暴力的な〈非自〉があるだけである」（『ことばが劈かれるとき』）。生が不条理な様相を呈する。

だが他方で、彼は苦悩の冠を規範として生きるようになっていた。問われたことに応えていくことができるようになっていた。そしてある時、「誰かのために」「何かのために」という一方的な思い、まさしく恣意的な思いが消失したところで、「他者が私に現れる」（同上）。「それでいいんだ」と肯定される。「他者を他者として」（早坂泰次郎『〈関係性〉の人間学』）見ることができるようになっていく。

自己実現には「他者の発見」（土井健朗著『〈甘え〉の構造』）が必要なのである。自己実現は、関係性への気づきからの他者による否定と、そこからもがき苦しむ過程を経て、他者の肯定を必要とする。そしてそのことが同時にまた、自己を開かれた存在へと舵をきらせてくれるようにする。ここにおいて、「生きる意味の観点変更」（V・フランクル著『夜と霧』霜山徳爾訳）が成立する。

こうした自己実現とは、当たりまえのことであるが、別人になることを意味するのではない。自己実現とは、当人のダイナミックな

変容としての生の統合化を意味する。苦悩の冠を規範として、問われたことに応えることができるようになっていくこと、自分自身で物事を考え、判断し、決断することができるようになっていくこと、このことが「ひとが生まれる」といった事態を指す。ところが、問題はなお依然として残っている。彼はなお、安定性を欠いている。こうした問題について第三章で、E・フロムの「実存的二分性」（『人間における自由』谷口隆之助、早坂泰次郎訳）という概念と、R・クワットの「社会的事実性」（『人間と社会の現象学』早坂泰次郎監訳）という概念に着目し、論じられている。

最後に、反逆者という青年について一言述べておきたい。戦後から省みて、今日ほど軽々しい人間についての人物評価が容認された時代はなかったように思われる。いわゆる「勝ち組、負け組」などという分け方は、その典型であろう。反逆者という青年は、もちろん区分け上、悪しき類に属するのだろう。

このような風潮に対する抵抗を、本論は試みていた。反逆者と呼ばれるような青年を見て、「どうしようもないやつだ」と嘲笑うことはできない。街角で、ぞうさもなく「ああいったやつは一生駄目だ」ということはできない。決めつけることはできない。なぜなら、人間には「自己破壊と再生」（M・ブーバー著『我と汝・対話』田口義弘訳）への道が、常に留保されているからである。本論はそのことの再確認でもある。

一義性と原理

松尾治郎

目次

序論
1 原理的な反復
2 一義的な差異
3 一義性と原理
諸結論

「一義性と原理」はさしあたり二つの事をその目的としている。それはまずドゥルーズ『差異と反復』を註解する事であり、そして、そこから生きる力についての哲学を行う事。この二つの事を繋ぐのは学ぶ事についての理論である。と言うのも『差異と反復』の説く理論は一つの学習論としても結実しているからであるし、生きる力についての哲学を行う事は「一義性と原理」が『差異と反復』から学んだ事だからである。そして『差異と反復』においてその学習論を構成しているのは理念と現実との二つの系である。この二つの系は差異と反復とからなる。理念的対象は現実の諸連関に力を配分する反復であり、その力の展開であるところの現実的な諸連関は端的に差異であるとされているからである。つまり、ドゥルーズにおい